

# 第1章 杵築市の歴史的風致形成の背景

## 1. 自然的環境

### (1) 位置

本市は、大分県の北東部、国東半島の南部に位置している。面積は、280.08km<sup>2</sup>、東西約29km、南北約23kmである。

南東は別府湾に面しており、西は宇佐市、北は豊後高田市、東は国東市、南は日出町に接する。別府市、大分市との距離は約20kmである。

また、愛媛県とは約40kmの距離にあり、晴れた日には杵築城の展望所から四国をはっきりと望むことができる。



図 大分県の位置

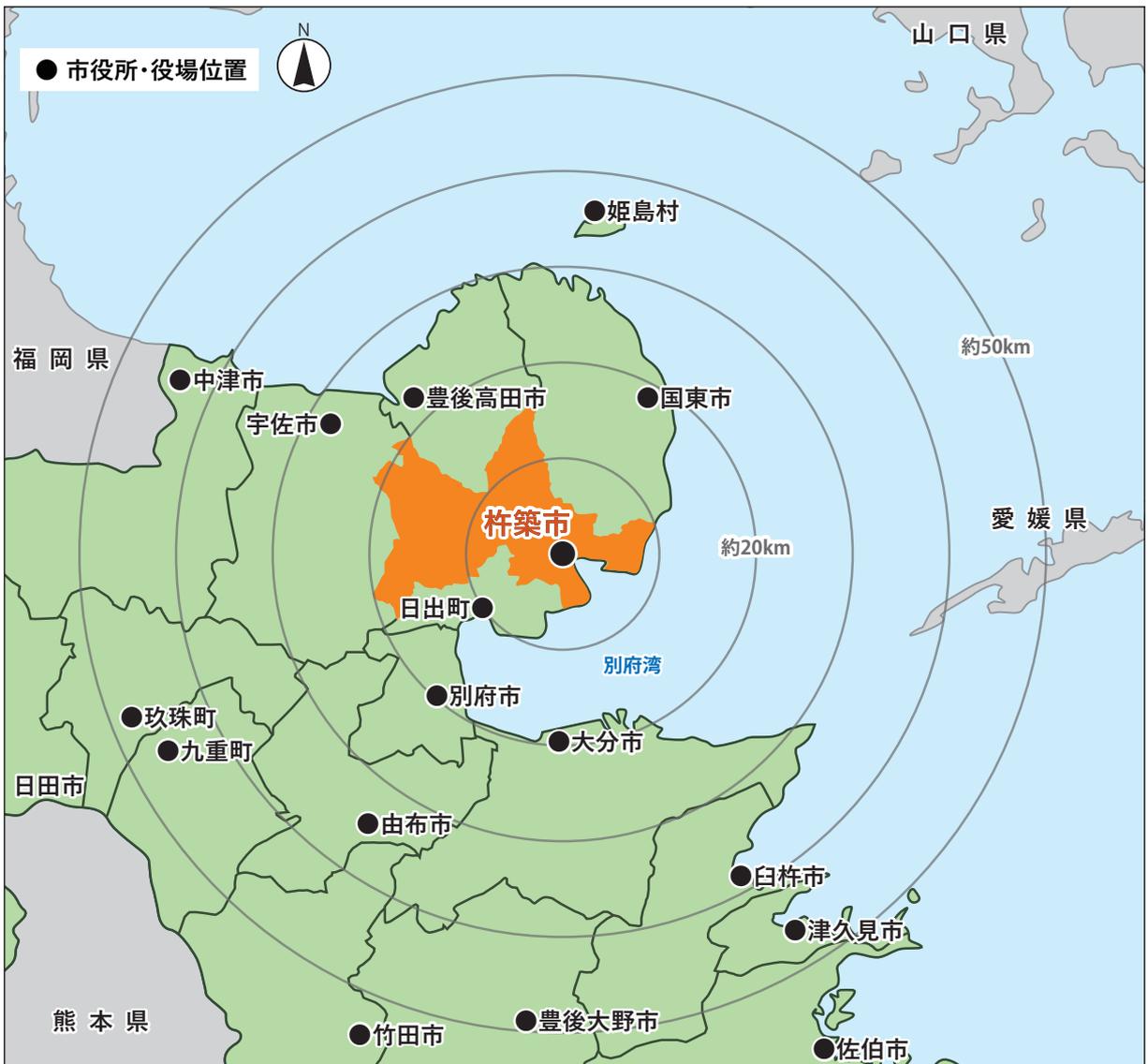


図 本市の位置

## (2) 地形・地質・水系

### 1) 地形

北西部は両子山から連なる山々や雲ヶ岳、御許山、華岳等、200mから600m級のなだらかな山々が囲む。東南部は伊予灘や守江湾を含む別府湾に面する海岸線となる。

北台南台伝統的建造物群保存地区のある杵築城の城下町は武家地や寺町である台地と町人地である谷地との高低差が大きく、それらをつなぐ重要な役割を果たしていた「坂」が特徴的な城下町である。

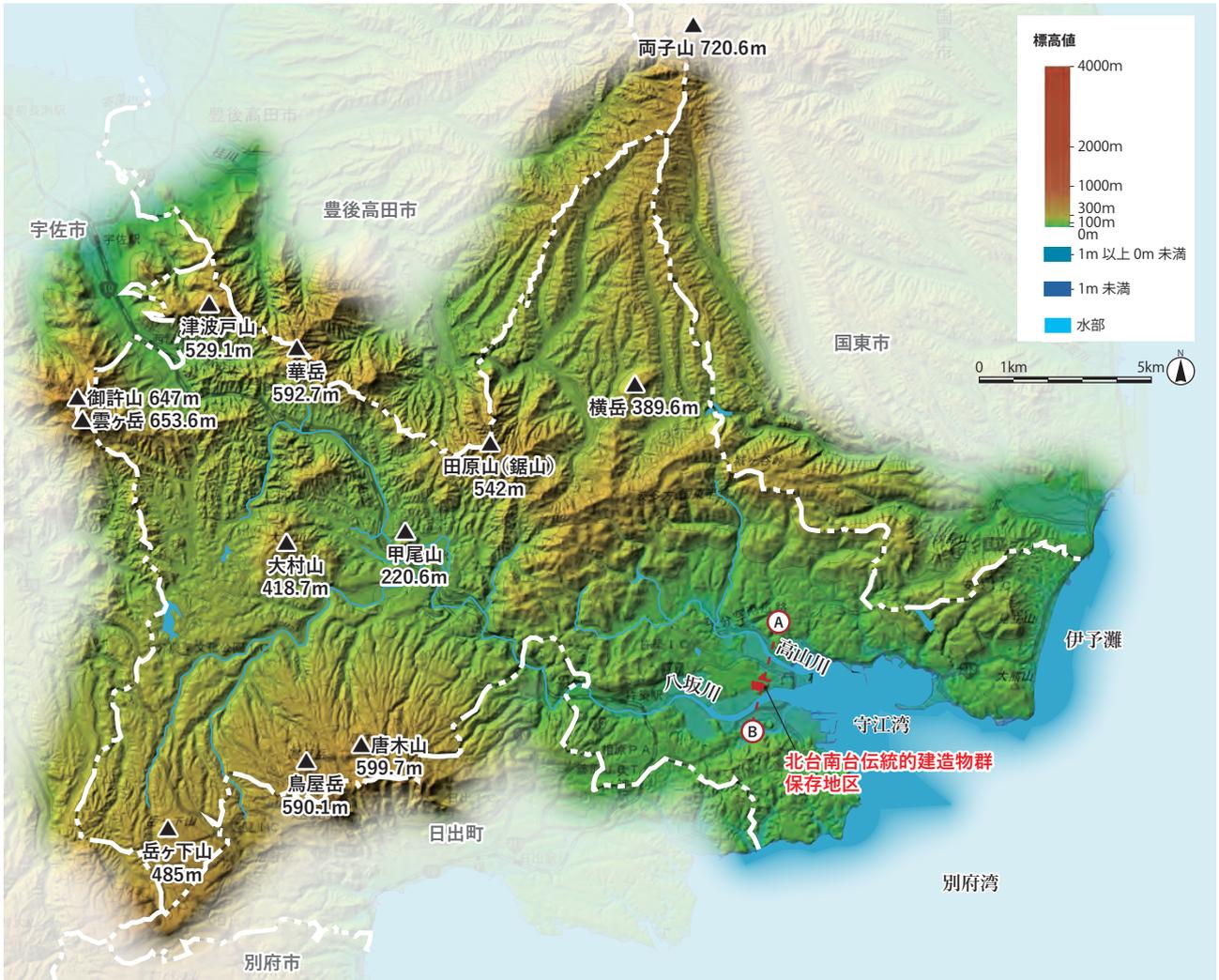


図 地形 (国土地理院ウェブサイト 地理院タイルを加工して作成) ※A-Bは下図 標高の断面線

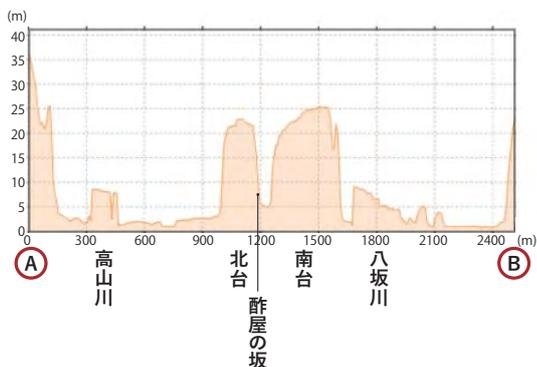


図 標高 (国土地理院ウェブサイトより断面図を加工して作成) ※上図のA-Bを断面線とした北台南台伝統的建造物保存地区周辺の標高



杵築城から見た城下町の地形

## 2) 地質

新第三紀安山岩及び流紋岩等の火山岩が多くの地質を占めている。

城下町のある守江湾沿岸は沖積層、伊予灘に面した奈多海岸から住吉浜にかけては花崗岩系の地質を有している。

山香地域や大田地域を中心に多くの石造物が存在する。これらの石造物は火山由来の凝灰岩や安山岩のものが多く見られる。

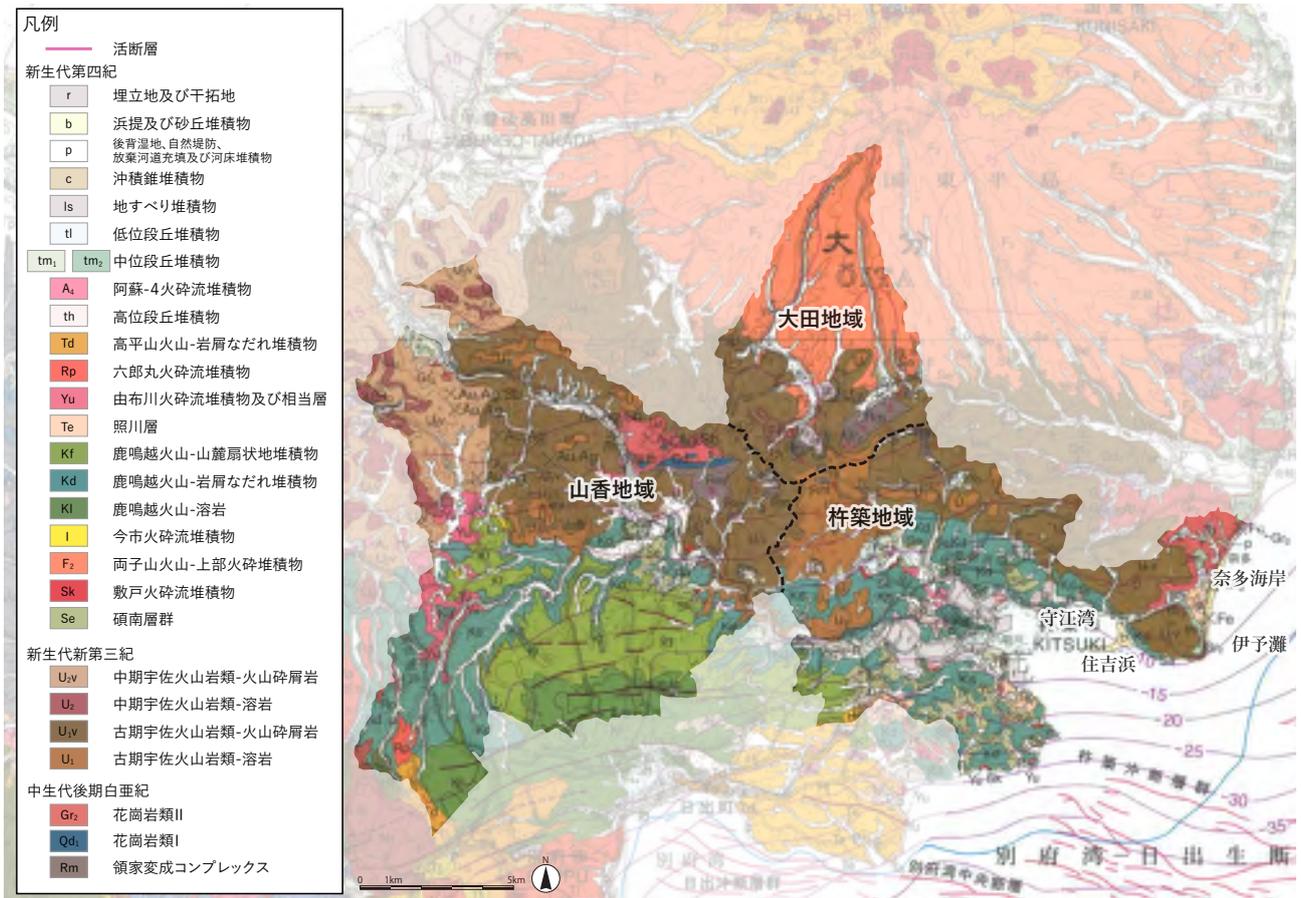


図 地質 (5万分の1地質図幅「中津」(産総研地質調査総合センター) (<https://gbank.gsj.jp/geonavi/geonavi.php#11,33.45527,131.55353>)を杵築市が加工して作成)



凝灰岩でできた西明寺石造三重塔  
(出典:山香町の文化財)



安山岩でできた龍蓮寺国東塔  
(出典:くさき半島大田村文化財)

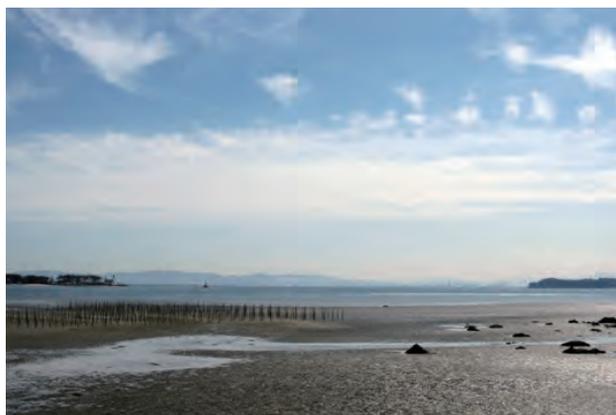
### 3) 水系

主な河川は、桂川、江頭川、天村川、古町川、住吉川、高山川、八坂川などがあり、高山川と八坂川が城下町のある台地を挟んでいる。このうち桂川、古町川、向野川以外の河川は守江湾に注ぎ、別府湾、伊予灘へと続いていく。古町川は直接伊予灘へと注いでいる。

溜池やダムも数多く存在する。これは、降雨量が少なく、地形的に河川が短いため、水田農業を営むために、先人たちが作り上げた農林水産循環システムの一部を担うものであり、今日も市内に潤いを与えている。



図 水系



守江湾



白水池

### (3) 気象

本市は瀬戸内式特有の温暖な気候に恵まれている。

年平均気温は15.9℃であり、最高気温は8月の35.6℃、最低気温は1月-4.2℃となっている（平成22年（2010）～平成31年（2019）の平均値）。

年間降水量は1627.6mmであるが、6月の降水量が突出して多く、353mmである（平成22年（2010）～平成31年（2019）の平均値）。積雪は年に1、2回程度と、ほとんどない。

表 年平均気温と年間降水量（資料 気象庁 過去の気象データ ※杵築における平成22年(2010)～平成31年(2019)の数値の平均値）

年平均気温	15.9℃
年間降水量	1627.6mm

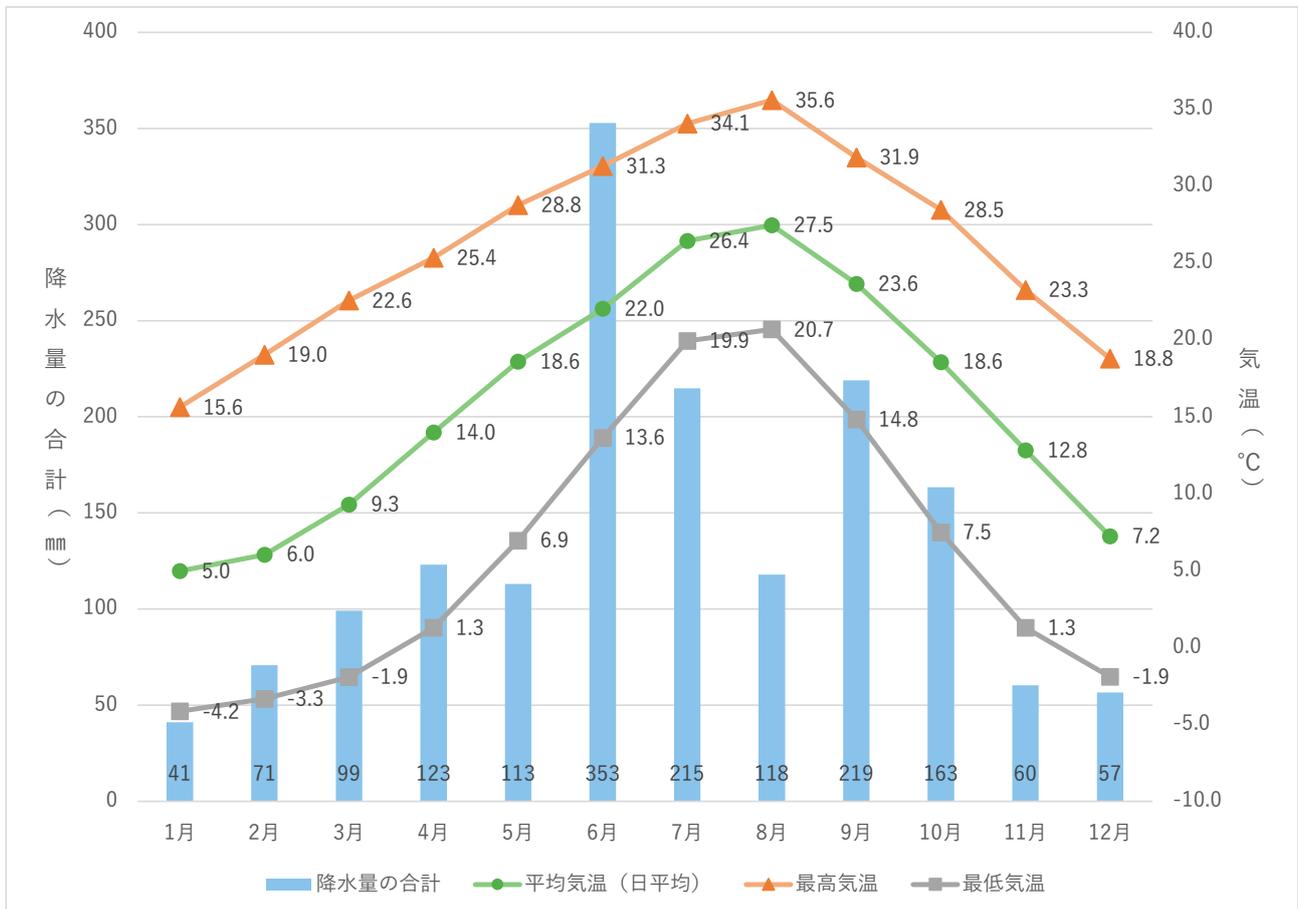


図 気温と降水量（資料 気象庁 過去の気象データ ※杵築における平成22年(2010)～平成31年(2019)の数値の平均値）

## 2. 社会的環境

### (1) 町村合併の経緯

昭和29年(1954)に田原村と朝田村が合併し、(旧)大田村が成立し、翌、昭和30年(1955)には杵築町、八坂村、北杵築村、奈狩江村が合併し、(旧)杵築市となった。同年、山香町と立石町、山浦村、さらに南端村の一部が合併し、(旧)山香町となった。

そして、平成17年(2005)に(旧)杵築市、山香町、大田村が合併し、現在の杵築市が誕生した。

現在でも旧市町村の経緯を引き継ぎ、大きく杵築地域、山香地域、大田地域と呼んでいる。



図 旧市町村の位置（『杵築市地域公共交通網形成計画』を基に一部加工）

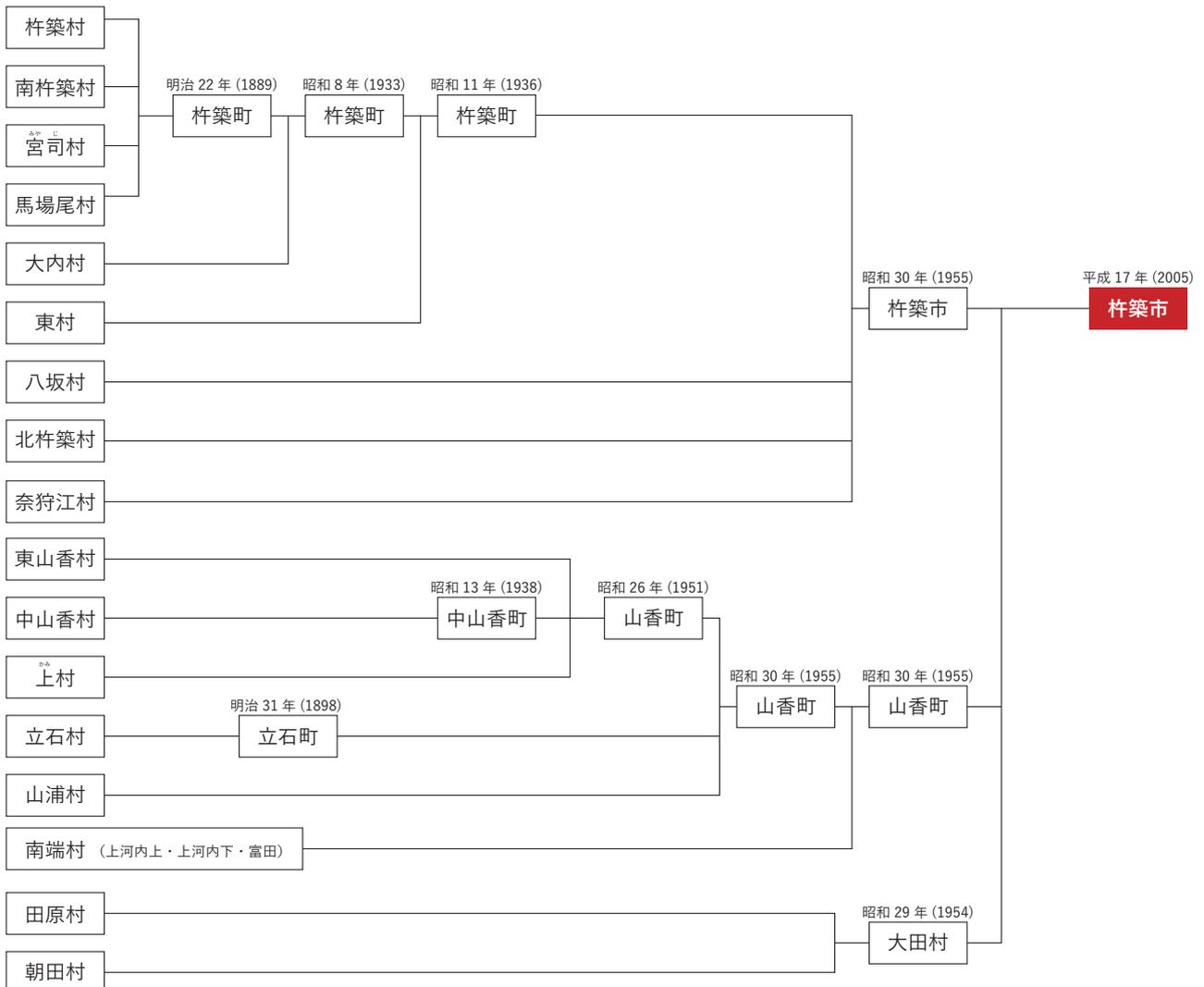


図 近代以降の本市の合併の経緯

## (2) 土地利用

最も多い土地利用が森林62.1%であり、特に山香地域と大田地域と杵築地域の北部に多く分布している。次いで、田15.1%、その他の農用地13.6%となっている。森林、田、その他の農用地で市内の土地利用の90%以上を占めている。

建物用地は4.6%程度であり、杵築地域にある市役所周辺の城下町一帯に集中している。山香地域の庁舎周辺にも小規模な市街地が形成されている。

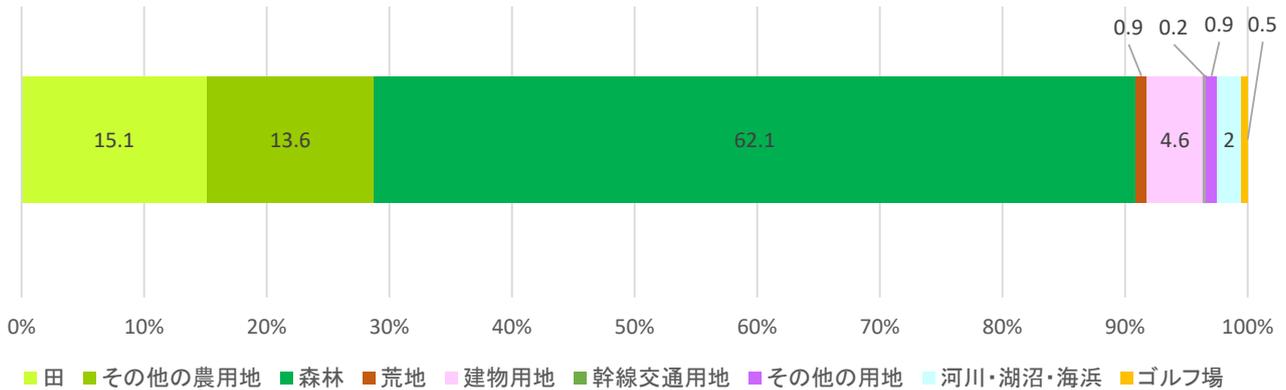


図 土地利用現況 (平成26年 (2014))

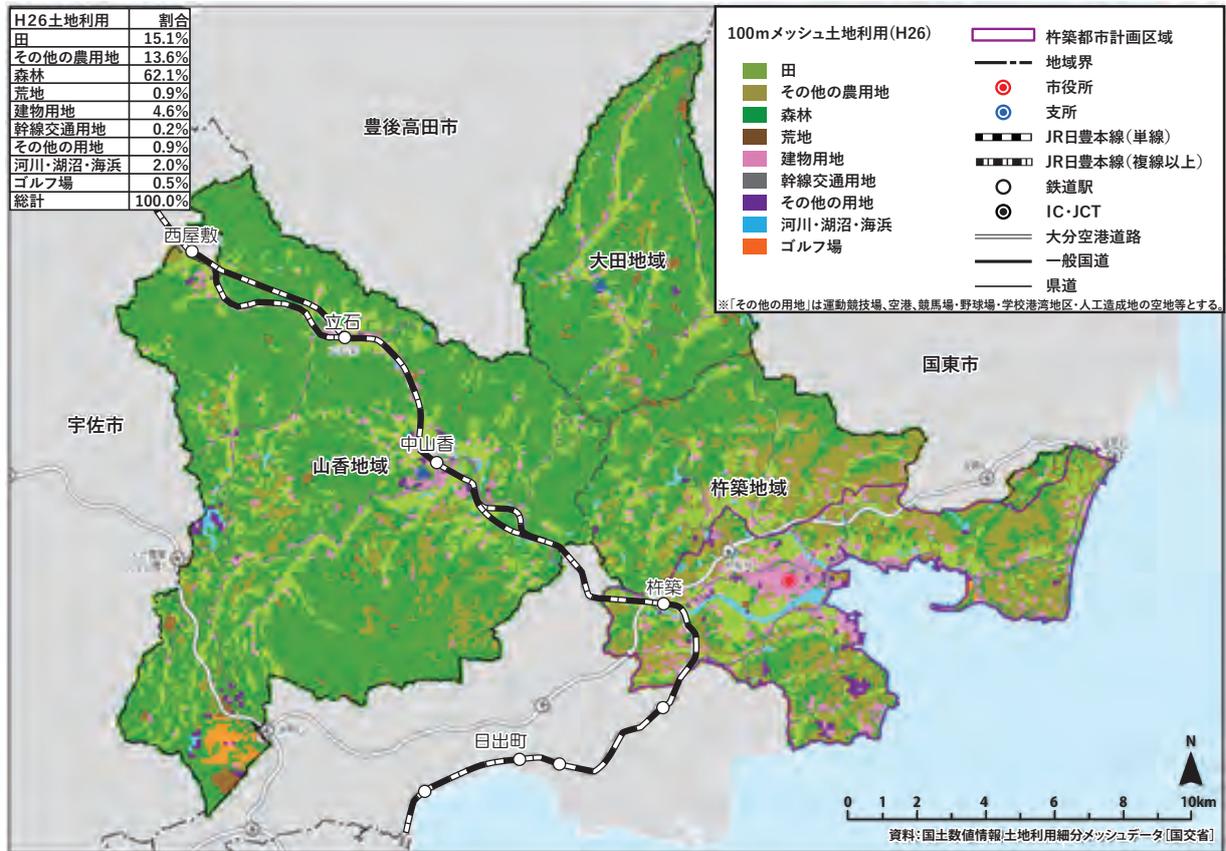


図 土地利用現況 (平成26年 (2014))

### (3)人口動態

人口は、昭和55年(1980)から現在にかけて、緩やかな減少傾向が続いている。1世帯当たりの世帯人員数は平成17年(2005)までに激減し、以降はほぼ横ばいである。平成27年(2015)では、人口30,185人、世帯数12,084戸であり、1世帯あたりの人員数は2.5人である。

世代別の人口では、年少人口と生産年齢人口が減少する一方、老年人口は増加傾向にある。平成27年(2015)では、人口の34.7%が65歳以上となり、少子高齢化が進行している。

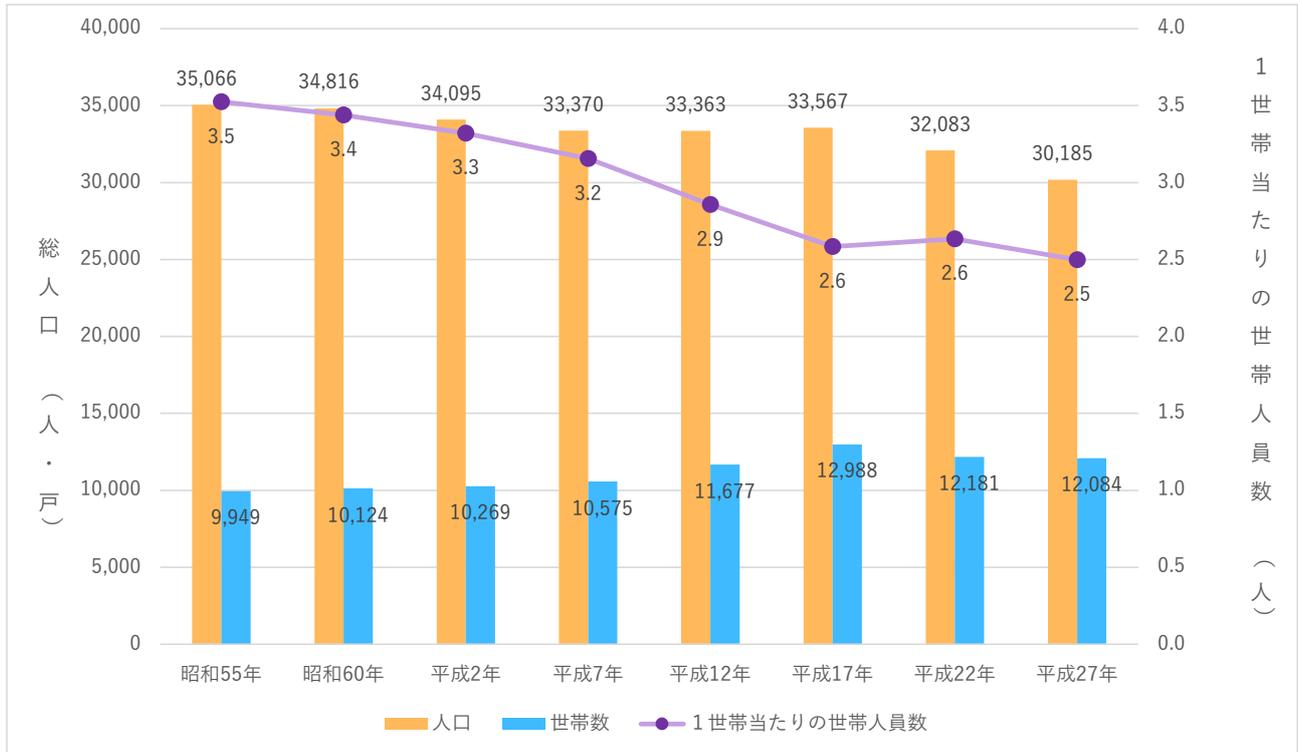


図 人口と世帯数の推移(資料 国勢調査)

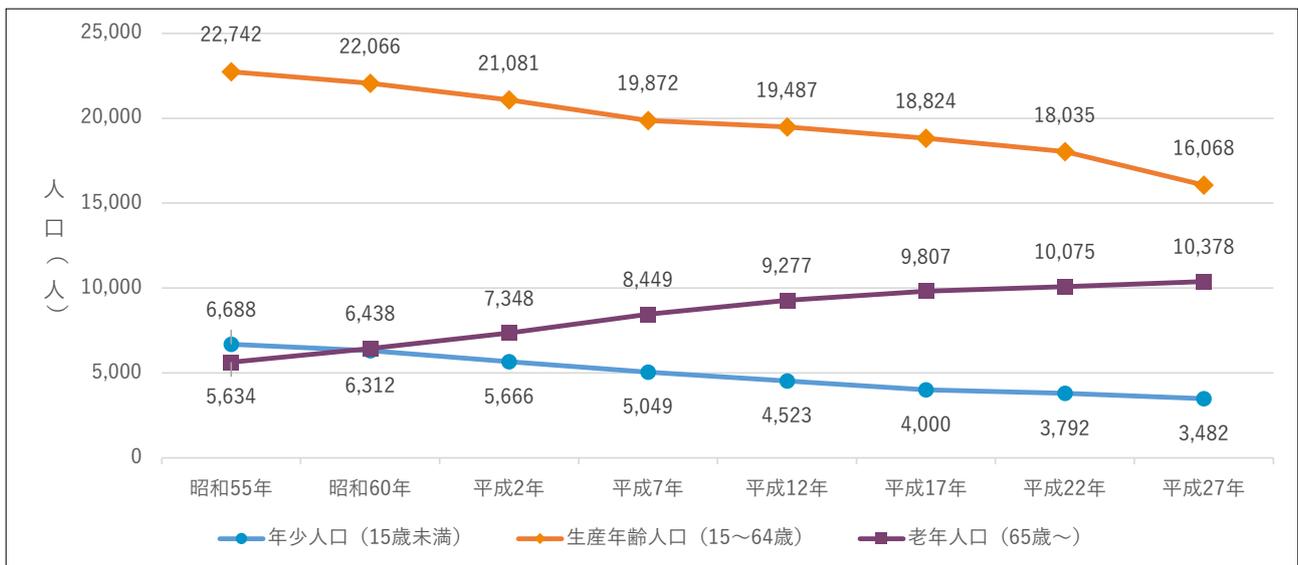


図 3世代別人口の推移(資料 国勢調査)



図 3世代別年齢構成(資料 国勢調査) ※平成27年(2005)の年齢不詳人口は含まない。

## (4) 交通機関

幹線道路が発達し、県内外を結ぶ交通の結節点となっている。加えて、鉄道をはじめ、路線バス、コミュニティバス、乗合タクシー、スクールバス（混乗）等が交通網を形成している。

主要道路として、高速・自動車専用道路については、杵築インターチェンジを有する大分空港道路が杵築地域の東西に通り、大分空港や国東市、日出町、別府市などと続いている。

また、国道10号が山香地域を南北に通り、宇佐市、日出町と接続し、国道213号が杵築地域を東西に通り、国東市、日出町と接続している。

鉄道は、国道10号と並行するようにJR日豊本線が通り、特急が停車する杵築駅のほか、中山香駅、立石駅がある。

路線バスは13系統、コミュニティバスは市内循環コース、山香コース、杵築コース、大田コースがある。



杵築駅



路線バス



図 主要交通網（『杵築市地域公共交通網形成計画』を基に一部加工）

## (5) 産業

### 1) 産業構成

#### ① 就業人口

産業別の就業人口の割合は、平成7年（1995）では、第一次産業28.1%、第二次産業が27.8%、第三次産業が44.1%であった。

その後、第一次産業は減少を続け、平成27年（2015）では、15.4%程度となっている。

第二次産業はわずかな増減はあるものの、平成27年（2015）においても26.4%を維持している。

第三次産業は、平成27年（2015）に54.0%と全体の半数以上を占めるまでに増加している。

このように、第三次産業が最も多く、次いで第二次産業、第一次産業という産業構成は、変わらないが、年々、傾向がより顕著になってきている。

しかし、全国の第一次産業の就業人口の割合が3.8%程度であることと比較すると、本市は一次産業が極めて高い割合を有しているといえる。



田園風景



誘致企業

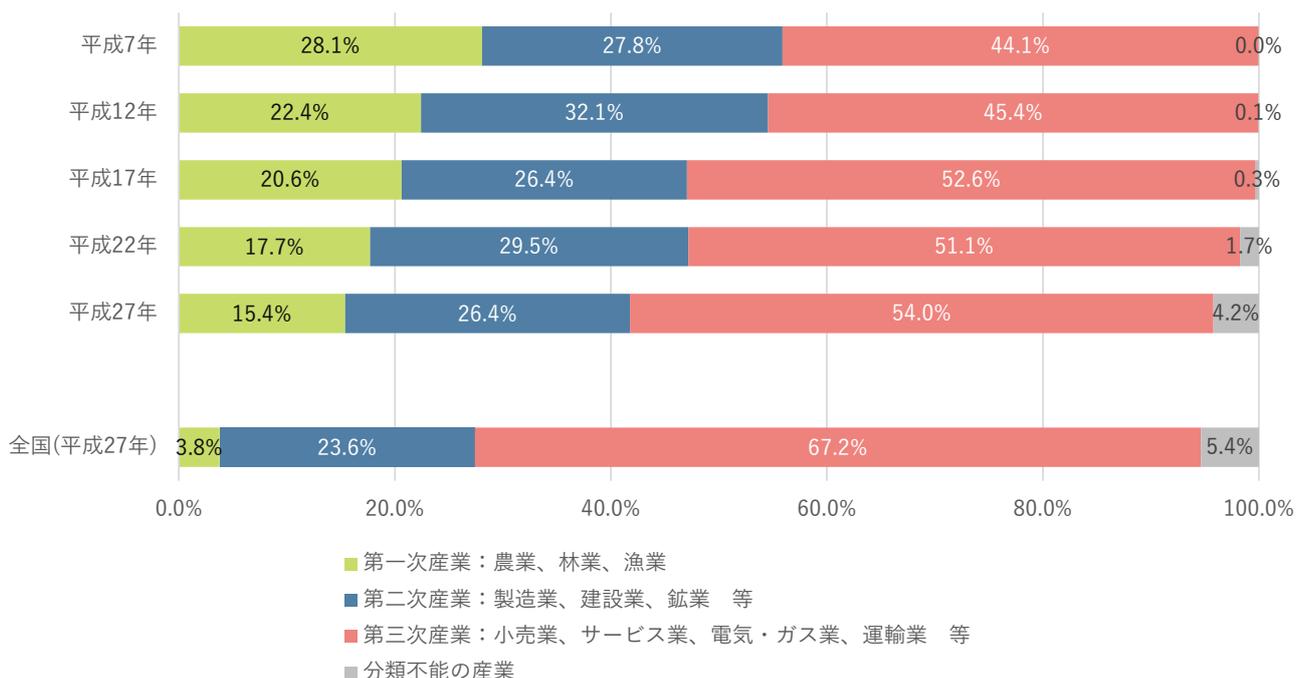


図 産業別就業人口の推移 (資料 国勢調査)

②農業・漁業

ア) 農業

柑橘類、きつき茶、山香米、いちごなど、温暖な気候を活かした農業が盛んである。

しかし、平成12年(2000)に2,690戸あった農家数は、平成27年(2015)に1,510戸と大幅に減少している。専業農家、兼業農家ともに減少傾向にあるが、特に兼業農家の減少が著しい。

一方、平成25年(2013)には、本市を含む国東半島宇佐地域が、国際連合食糧農業機関(FAO)から世界農業遺産(GIAHS)に認定された。クヌギ林と複数の溜池が連携したシステムが原木しいたけ生産、七島蘭しちとうい(p.38参照)生産など、多様な農林水産業を担っていることが評価されている。この農林水産循環システムによって、豊かな森林、里山の環境が保全されている。

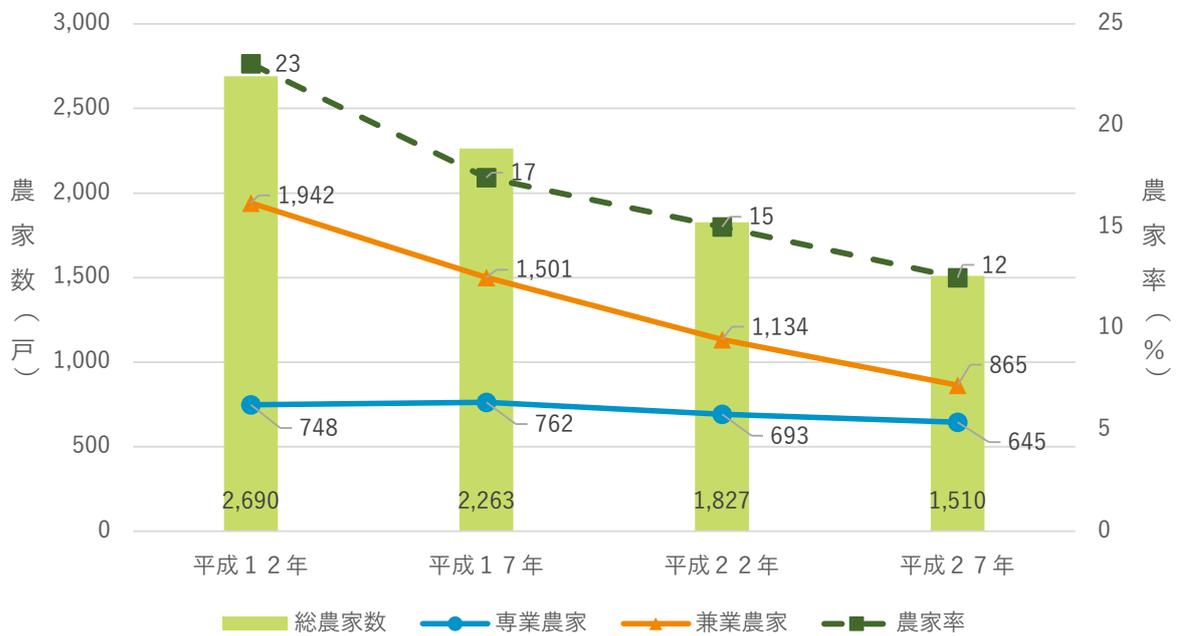


図 農家数と農家率の推移 (資料 農業センサス)



図 農林水産循環システム (出典: 国東半島宇佐地域世界農業遺産パンフレット)



柑橘栽培

## イ) 漁業

杵築地域は伊予灘、別府湾両方の好漁場に面し、市内に広がる守江湾干潟中央部にはアマモ<sup>※1</sup>が広がり、カブトガニやアオギスが生息している。このような地理的な条件を活用し、沿岸域ではハマグリ、ヒジキの採貝・採藻漁業や小型定置網漁業、刺網漁業、牡蠣養殖漁業が営まれ、沖合域では機船船曳網漁業、小型底曳網漁業といった多様な漁業が営まれている。漁業種別の経営体数を比較すると小型底曳網漁業（ハマ、イカ類、エビ類等）が全体の過半数を占めるが、漁獲高、漁獲金額においては機船船曳網漁業（シラス、カタクチイワシ）がもっとも多く、この2つが本市の主要漁業となっている。

海面漁業経営体数は、高齢化、魚価安、燃料代の高騰などの影響により、全体的に減少傾向にあるが、特に兼業の減少が著しい。また漁船規模が5t以下の経営体が8割を占めており、「規模の小さい経営体ほど後継者不足に直面している」という農林水産省の統計どおり、現状は厳しい。それでも年間の漁獲量は約3,500t、漁獲金額は、約12億円と大分県内では3番目で県北地域では最大の漁獲量を誇っている。

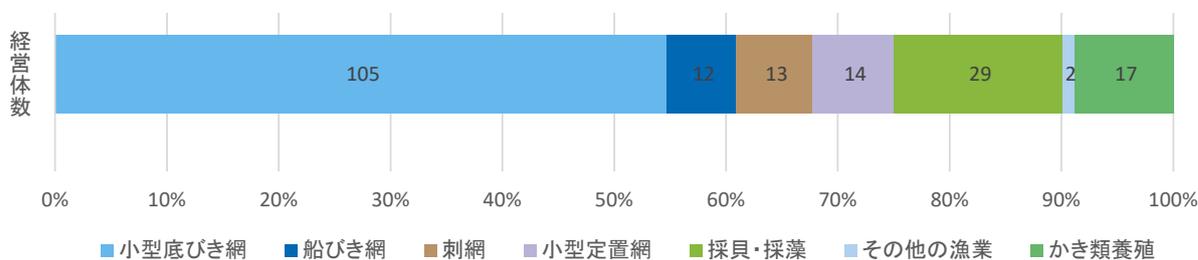


図 主とする漁業種類別経営体数（資料 漁業センサス 平成25年（2013））

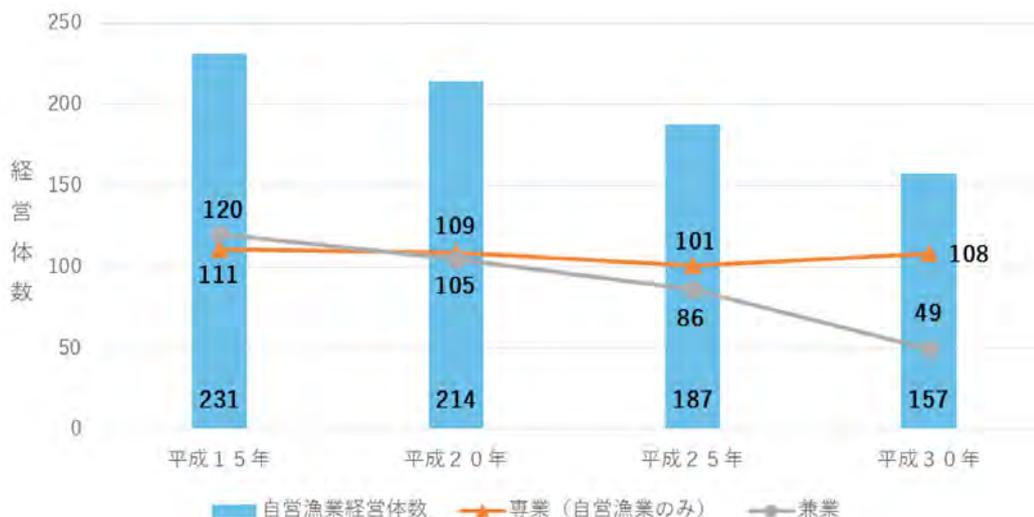


図 海面漁業経営体数（自営）の推移（資料 漁業センサス）



カタクチイワシを加工したちりめん



牡蠣養殖

※1: 砂底や泥底に形成される海産種子植物（海草）。アマモが広がった藻場は様々な海洋動植物の生息場所となるなど沿岸海域の多様な機能を担っている。

③工業

昭和58年(1983)に大分県テクノポリス開発構想の中で、県北国東地域の中核都市としての指定を受け、その後、昭和59年(1984)に(株)杵築東芝エレクトロニクス、昭和60年(1985)に(株)デンケン杵築工場、昭和61年(1986)にダイヘンテック(株)といった従業員数が100人から500人規模の企業の進出があった。平成に入ってから、平成11年(1999)に大分キャノンマテリアル(株)、平成12年(2000)に(株)川田建設九州工場の進出、平成29年(2017)には(株)デンケンML事業部が杵築市内に新拠点を置き、令和元年(2019)度にグループ会社の新電力おおいた株式会社杵築営業所を同事業所内に開設する等、多くの企業の進出を見ることができ、地場企業への波及効果もあり、多くの就業人口を維持することができている。

平成21年(2009)から平成30年(2018)の推移をみると、事業所数は緩やかな減少傾向にあるものの、従業者数と製造品出荷額はほぼ横ばいであり、活発な製造活動が続いている。

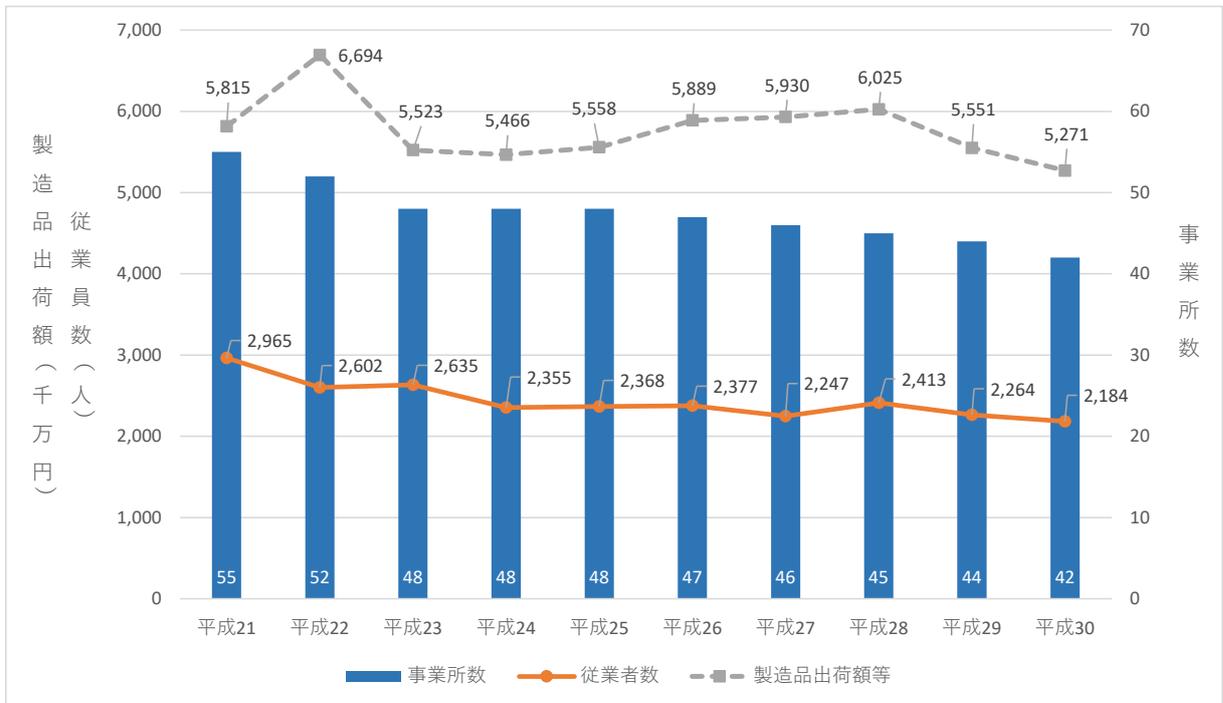


図 事業所数、従業者数及び製造品出荷額の推移 (資料 工業統計調査)



大分キャノンマテリアル(株)



(株)デンケン杵築工場(健康・医療機器関連)

## 2) 観光

杵築城やその城下町にある旧大原家住宅、<sup>のうみ</sup>能見邸、<sup>いそや</sup>磯矢邸をはじめとする武家屋敷、武家地に挟まれた谷地にある町人地、<sup>ひとつまつ</sup>一松邸や<sup>しげみつ</sup>佐野家や重光家など郷土の歴史を伝える歴史的な建造物や町並みが観光資源としても活用され、多くの人々が訪れている。江戸時代の情緒を伝える町並みを活かして、時代劇の映画の撮影地にもなっている。

平成21年(2009)には、和服で歩きたいまちを目指して「きつき和服応援宣言!」を実施し、NPO法人きものを着る習慣をつくる協議会から、全国初となる「きものが似合う歴史的町並み」に認定された。平成23年(2011)には、杵築市観光協会による「きものレンタル事業」を実施。和服姿の人には公共観光施設の入館料が無料になるなどの特典があり、城下町を和服で歩く人々の姿が多く見られるようになった。

外国人観光客は、九州から近い中国、台湾からのツアー客が増加している。これは別府や湯布院といった温泉施設への人気が高いことから、そこから比較的距離の近い杵築の城下町へ立ち寄る傾向があると考えられる。

城下町以外には、大分農業文化公園や温泉施設風の郷、<sup>さと</sup>住吉浜リゾートパーク等の来訪者が多く、その多くは国内からの日帰り客で、別府や湯布院といった温泉施設で宿泊する傾向が大きい。

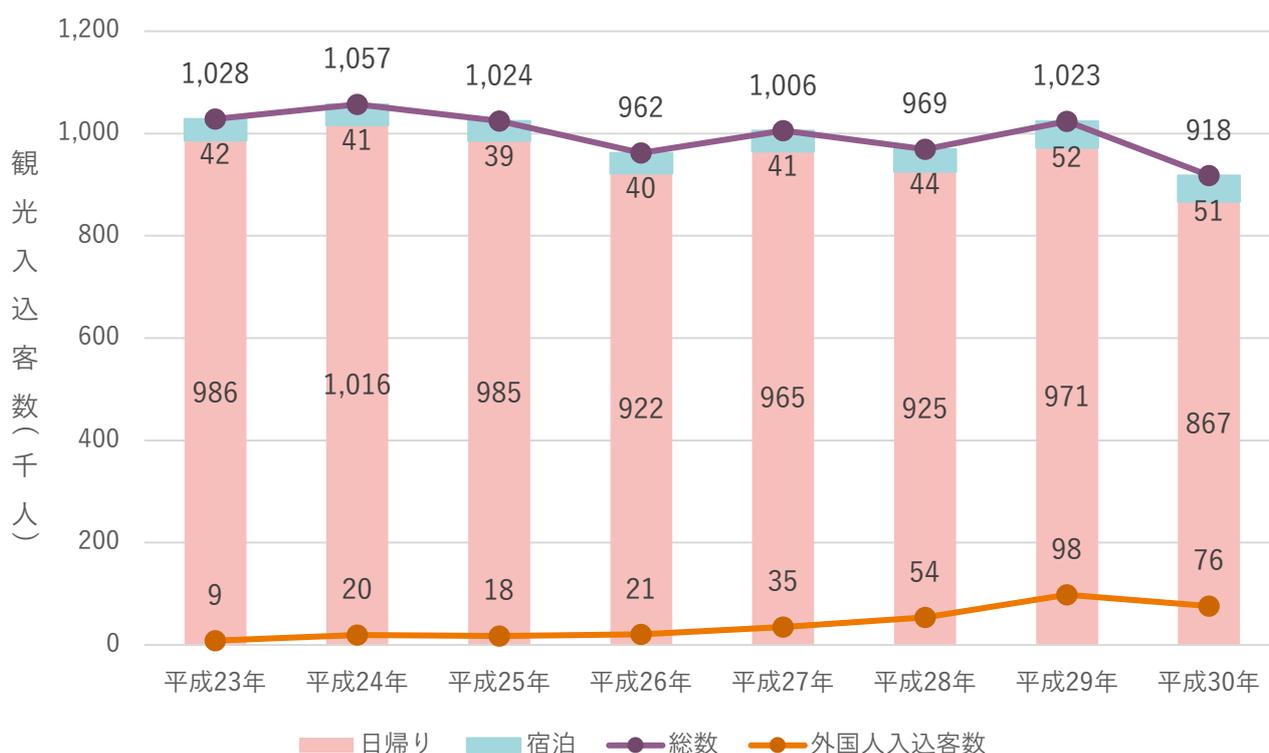


図 観光入込客数の推移 (資料 商工観光課)

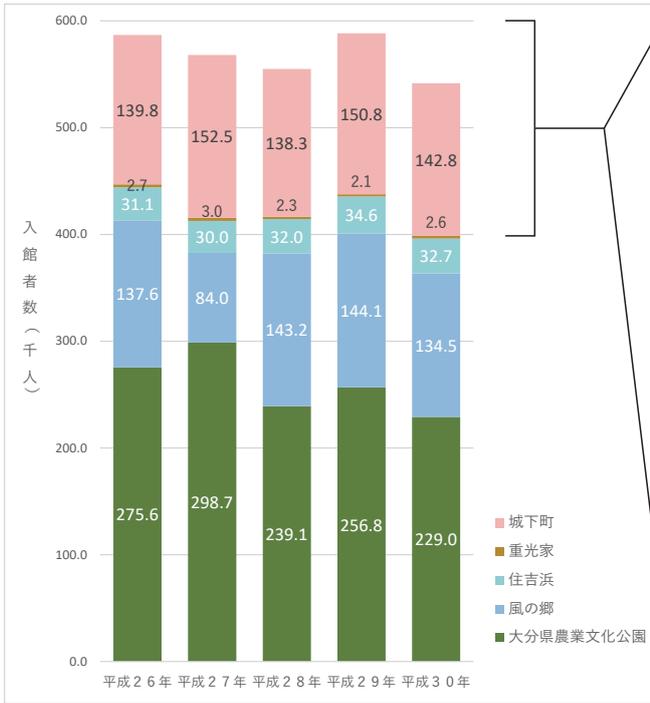


図 主な観光施設の来訪者数の推移

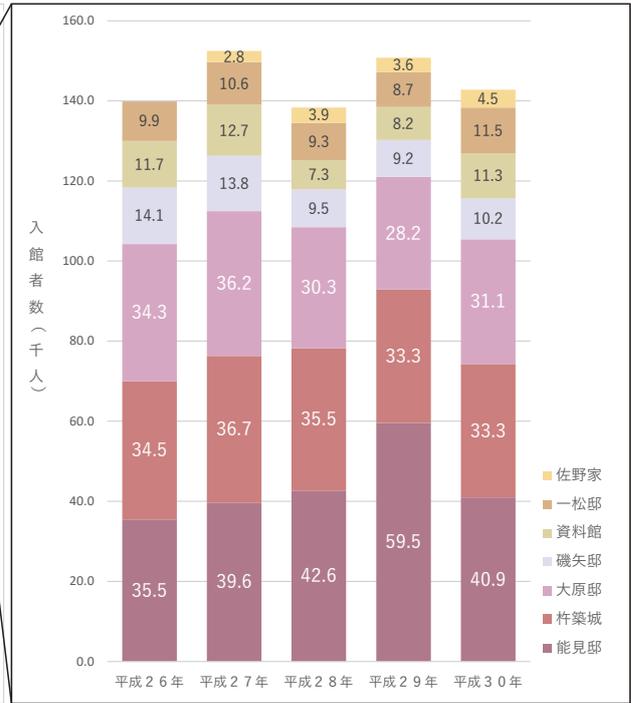


図 城下町の主な観光施設の来訪者数の推移



能見邸



杵築城



佐野家



きつき城下町資料館



### 3. 歴史的環境

#### (1) 歴史

##### 1) 原始・古代

##### ① 旧石器時代

市内に人が住み始めたのは、約3万年前といわれる。それを示す旧石器時代の遺跡としては、杵築地域の平河原池遺跡、久保畑遺跡、黒川遺跡、山香地域の目久保遺跡などが確認されている。中でも黒川遺跡からは旧石器から弥生時代にわたる石器6,000点以上が出土しており、流紋岩の今峠型ナイフ形石器（11.2cm）は県内最大級の大きさを誇り、石器の出土量も県内屈指である。



久保畑遺跡



黒川遺跡

黒川遺跡  
今峠型ナイフ形石器

##### ② 縄文時代

縄文時代の遺跡として、守江湾に位置する稲荷山遺跡がある。稲荷山遺跡からは押型文土器と無文土器という異なる特徴をもつ土器と一緒に発掘されており、縄文時代早期の標識遺跡となっている。また、縄文時代後期には神領貝塚や東貝塚といった遠浅の海岸を利用した貝塚が展開する。神領貝塚は平成5年度の圃場整備で新たに発見された遺跡で、4種以上の土器や姫島産の黒曜石を使用した石器のほか、多量の貝類や獣・鳥・魚の骨が出土している。

龍頭遺跡から出土した編物製品  
(出典：きつきの歴史・文化財なるほど!ブック)

また現在の山香地域には、縄文時代早期から後期の川原田洞穴遺跡や龍頭遺跡がある。特に龍頭遺跡からは、木の実を保存するための貯蔵穴が53基も発見され、その内部からは約35万個（総重量約405kg）のドングリとともに、保存状態のよい編物製品（編みカゴ）9点出土し、縄文時代後期の食料貯蔵の貴重な具体例となっている。

### ③弥生時代

弥生時代の遺跡としては、中期の遺跡として報告されているJR杵築駅東遺跡や新宮遺跡がある。新宮遺跡からは細型銅剣などが出土している。

鴨川地区<sup>ごた</sup>五田遺跡からは弥生時代後期後半の多量の土器類のほか、小型仿製鏡<sup>※2</sup> 1点が出土しており、当地は有力集落が存在していたと想定される。また野田地区や先述の黒川遺跡では、多量の弥生時代の石器が出土しており、石包丁も数点出土していることから稲作を受容しつつも従来の狩猟の比重が多かったことが見てとれる。一方、山香地域では、大原遺跡において集落跡が確認されているほか、先述の龍頭遺跡からは柱穴群が出土、そのほか2ヶ所で青銅製品が確認されている。



五田遺跡



五田遺跡から出土した小型仿製鏡  
(出典：きつきの歴史・文化財なるほど！ブック)

### ④古墳時代

古墳時代の遺跡は、200墓以上にのぼる古墳が確認されており、県下でも有数の古墳密集地とされている。代表的なものに、県内最大級となる小熊山古墳<sup>こぐまやま</sup> (国指定の史跡)、古墳時代中期に相当する御塔山古墳<sup>おとうやま</sup> (国指定の史跡)があるほか、後期には八坂川流域・高山川流域・狩宿地区・奈多地区などの平野や丘陵地を中心に数多くの古墳が築造されている。

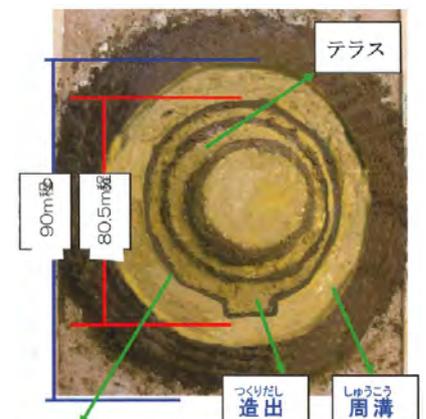
杵築市狩宿にある小熊山古墳、御塔山古墳は、海を臨むように立地する古墳である。小熊山古墳は墳丘規模116.5mの県下最大級の前方後円墳<sup>ぜんぽうこうえんふん</sup>であり、九州最古の円筒埴輪<sup>はにわ</sup>が出土している。

御塔山古墳は、直径75.5mに5mほどの造出<sup>つくりだし</sup>とよばれる古墳に直接取りつく方形で壇上の施設が付く墳長80.5m程の造出付円墳である。革もしくは木などの有機質の短甲を模した埴輪・木樋形土製品・円形埴輪など九州では出土例が少ない形象埴輪が出土している。

小熊山古墳と御塔山古墳の出土品は当時の政治的中心である畿内の影響を色濃く受けていることが読み取れ、当時の社会にとって重要な地域であることを示している。



御塔山古墳と小熊山古墳



御塔山古墳  
(出典：東西交流の窓小熊山古墳・御塔山古墳―九州と瀬戸内海をつなぐ両古墳)

※2：中国鏡を模倣して日本で作った銅鏡。祭事に使用され、権力の象徴として地域を治めた人物が持っていたものと考えられている。

そのほか、円筒形埴輪が出土した五田天神遺跡、金銅獅嚙環頭大刀が出土したシラハゲ古墳、竪穴系横口式石室の名称を初めて使用した古墳として学史上有名な七双子古墳群、多くの副葬品が発掘調査によって確認された的場2号古墳などがある。



七双子4号古墳

## ⑤ 古代

現在の大分県は古代は豊前国と豊後国に分かれており、現在の本市の地域は、速見郡と国埼郡（現在は国東）と呼ばれていた。

奈良時代、都では天皇を中心とする国づくりが行われていたが、南九州の人々は朝廷に反抗し、反乱を起こした。このとき、朝廷が八幡神を守り神として出陣し、勝利を治めたことなどから、八幡神は戦の神様として知られるようになった。本市の西部に位置する御許山は、八幡神が現れたとされる地であり、のちに八幡神を祀る総本宮である宇佐神宮が宇佐市に建てられた。本市には宇佐神宮の一神である比売大神が現れた地といわれる八幡奈多宮がある。境内前の海には比売大神が降り立たとされる市杵島という鳥居を建てた小島がある。八幡奈多宮はこの時代から続く宇佐神宮の祭礼である行幸会の終着地であり、高い格式を有している。



八幡奈多宮



奈多の市杵島

平安時代、現在の本市は宇佐八幡宮と神宮寺宇佐弥勒寺の荘園となった。また、山岳信仰と結びついた仏教文化として六郷山が栄えた。六郷とは、国東にある武蔵、来縄、国東、田染、安岐、伊美の6つの郷にある寺の総称で、実際には山香地域も含まれている。石風呂が残る泉福寺は六郷山の寺である。



泉福寺の石風呂

## 2) 中世

鎌倉時代、鎌倉に幕府が開かれ、武家の政治が始まると、本市でも六郷山の勢力と武士の勢力が争うようになっていった。

建保元年(1213)、現在の太田地域に田原泰広が田原荘に入ってから、武士が勢力を有するようになった。南北朝時代になると、田原直平は沓掛城を築いた。直平の供養塔が大田地域にある田原家五重塔である。しかし、



田原家五重塔

田原氏は大友氏の攻撃を受け、断絶となった。

建長元年(1249)、大友家2代親秀の六男親重が木付の地(現在の杵築地域)を任せ、木付氏を名乗るようになった。親重は竹ノ尾城を築き、その後4代にわたって居城とした。

応永元年(1394)に4代頼直が木付城を築き、竹ノ尾城から居城を移すと、木付城は文禄2年(1593)に木付氏が滅びるまで、代々の居城となった。そして、木付城はその後細川忠興の家臣である松井康之など数人の有力武士によって受け継がれていった。

慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いにおいて、豊後の城で当初から東軍についたのは、細川氏の家臣松井康之らの木付城だけであった。そのため、西軍の大友氏が大軍を率いて木付城に攻め込み、城にこもった木付勢は苦戦を強いられた。この時、駆け付けた中津藩主黒田官兵衛の兵が船をつないだとされる孝高石が残っている。



竹ノ尾城址



孝高石(出典:きつきの歴史・文化財なるほど!ブック)

### 3) 近世

#### ① 藩政の成立

寛永9年(1632)、小笠原忠知が初代木付藩主となった。その後、正保2年(1645)に松平英親が木付藩主となってから、10代にわたり松平家が木付藩を治めた。

英親は本格的な城下町の整備を行った。城下町の東端に位置する城鼻は商港として多くの船が行き交った。船は大阪から瀬戸内海の諸港を往復するものであり、商品の取引のほか、参勤交代も海上交通を利用した。このため、町に入る人や物を取り調べる御船手番所、御用米蔵をはじめとする多くの蔵、御船手役所、常夜灯など、城下町の海の玄関口としての施設が整備された。

城下町ではたびたび火災に見舞われたため、藩政として火の用心や用水の確保が重視された。町筋に沿って流れる谷川や井戸を用水として利用するほか、用水桶に水を満たして備えつけるよう命じていた。人々はほかの地域で火事があったり、日照りが続いたりすると、天神社などで「火伏せの祈禱」を行い、心を落ち着かせていた。

また英親は、万治元年(1658)に尾弘池、延宝年間(1673~1681)に白水池を築造して、新田開発を推進した。寛文(1661~1673)のころに輸入された七島蘭の栽



城鼻地区



白水池

培も次第に盛んになり、城下町の周辺には多くの水田が造成された。

山香地域は江戸時代、日出藩領と立石領であった。

## ②教育の発展

7代藩主松平親賢ちかかた（学習館建設は8代藩主親明ちかあきらともいわれている）は学習館という藩校を建てるなど教育に力をいれた。学習館設立にあたっては、梅園塾みうらばいえんの三浦梅園に政治や学問について意見を求めた。学習館では国語や算数、書道に加えてフランス語も教えていた。さらに弓術や剣術などの武芸の稽古もしていた。武士以外も希望すれば藩校に入学することができた。

また、立石領の木下家に預けられた山田蘇作やまだ そさくが地域の人々への恩返しとして塾を開いて学問を教えるなど、私塾や寺子屋も各地にあった。



学習館の跡 藩校の門  
(出典：きつきの歴史・文化財なるほど!ブック)

## 5) 近代・現代

### ①明治以降の体制

明治2年(1869)の版籍奉還はんせきほうかんにより封建体制が終了した。明治4年(1871)7月14日に杵築藩は杵築県に、立石領は日田県となり、同年11月14日に大分県に移行した。

昭和29年(1954)に田原村と朝田村が合併し、(旧)大田村が成立し、翌、昭和30年(1955)には杵築町、八坂村、北杵築村、奈狩江村が合併し、(旧)杵築市となった。同年、山香町と立石町、山浦村、さらに南端村の一部が合併し、(旧)山香町となった。

そして、平成17年(2005)に(旧)杵築市、山香町、大田村が合併し、現在の杵築市が誕生した。

### ②交通の発展

明治44年(1911)に日豊本線にっぽうほんせんの杵築駅(現在のJR杵築駅)が八坂地区に開業した。

その後、大正3年(1914)国東鉄道(株)が発足し、大正11年(1922)7月に市街地である北浜地区に杵築町駅を作り、杵築駅から杵築町駅間で鉄道運輸業が開始され、同年12月には杵築町駅から守江駅まで開通、さらに、昭和10年(1935)に国東まで開通した。国東鉄道の開通によって、人や物資の輸送が便利になり、地域の発展の原動力となった。



大正11年(1922)ごろの守江駅  
(出典：杵築市誌)

しかし、昭和36年(1961)集中豪雨のため国東鉄道が寸断された。このとき、鉄橋が流されるなどの大変な被害を受け、復旧の見込みが立たなかったことから、昭和41年(1966)には国

東線は廃止となった。

昭和42年(1967)に杵築町駅はバスターミナルに生まれ変わった。

### ③町並み保存

昭和56年(1981)に城下町で伝統的建造物群保存対策調査が行われ、城下町の町並み保存の機運が高まった。

平成4年(1992)には杵築地区居住環境整備街路事業調査報告書を考慮し、都市計画道路の変更と13路線を歴史道路とする都市計画が決定され、平成16年(2004)までに杵築地区歴史道路整備計画事業を実施した。

平成8年(1996)には杵築市旧町家地区地区計画における建造物等の制限及びまちづくりに関する条例が施行され、平成20年(2008)に範囲を北台南台へと広げて、町並み形成に取り組んできた。

平成26年(2014)に再度、保存対策調査を実施し、平成28年(2016)に北台南台伝統的建造物群保存地区を都市計画決定し、翌年、重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

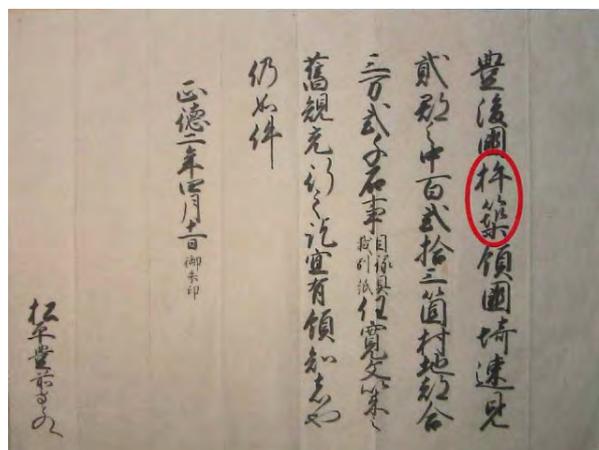


北台南台伝統的建造物群保存地区

## コラム || 木付と杵築

江戸時代、将軍は全国の大名に対して、代替わりごとに朱印状を渡していた。

正徳2年(1712)、六代将軍の朱印状に、それまで使われていた「木付」ではなく、「杵築」と書かれていた。そこで、幕府の朱印係に申し出て、その後「杵築」の字を使用するようになった。



領地朱印状写(杵築市立図書館蔵)

## (2) 杵築市の歴史に関わりのある人物

### 1) 松平英親 (寛永2年(1625)～宝永3年(1706))

正保2年(1645)に木付藩の藩主となり、以降、松平家が10代にわたって、227年間藩主を務めた。

英親は、北台、南台の武家地を整備するなど、現在のまちなみの骨格となる城下町を整備した。また、溜池の築造、<sup>ずいどう</sup>隧道の整備、新田開発に注力し、米や七島藺(p.38参照)の生産を奨励した。青筵神社では七島藺の恩人として、杵築神社では殖産興業の恩人として祀られている。



松平英親が築造した白水池

### 2) 三浦梅園 (享保8年(1723)～寛政元年(1789))

国東市安岐町富永出身。宇宙の条理について探求した哲学、自然科学者である。

幼いころより、何事にも「何故か」と疑問を持ち、探求した。30歳のころに宇宙の条理を『玄語』、『贅語』、『敢語』に著した。

天明6年(1786)には、7代藩主親賢から藩の学事や藩政に対する意見を求められ、『丙午封事』を献上した。

また、医者をしてしながら、「梅園塾」を開き、教育にも力を注いだ。



三浦梅園 (出典:きつき偉人伝)

### 3) 麻田剛立 (享保19年(1734)～寛政11年(1799))

杵築南台出身の天文学者で、解剖医家でもある。本名は綾部<sup>あやべ</sup>妥彰<sup>やすあき</sup>。

宝暦13年(1763)に、当時使用されていた幕府の暦にない日食を1年前に予告し、的中させた。藩主に仕える医者であったが、大坂(現在の大阪府)に出て、人体解剖研究や天体観測に力を入れ、人体解剖図や月面観測図を遺した。

月には「アサダ」と名付けられたクレーターがある。また、日本全国を測量し、日本地図を作った伊能忠敬は剛立の孫弟子である。



麻田剛立が描いた『月面観測図』の写 (出典:きつき偉人伝)

### 4) 野口善兵衛 (文政2年(1819)～明治10年(1877))

山香町立石出身。立石領木下家の家臣である。

大分市鶴崎の毛利空桑や日出の帆足万里に師事して勉学に励み、積極的に産業開発の必要性を説いた。

20歳で立石に戻ると、日照りの害を防ぐための楠原大池などの15の溜池の造成、<sup>はぜ</sup>櫛の栽培の推進、数十万本の杉、檜の植林など、産業発展に努め、現在に続く多大な功績を遺した。



野口善兵衛功德碑 (出典:きつき偉人伝)

5) <sup>かなまるまがね</sup> **金丸鐵** (嘉永5年(1852)～明治42年(1909)) /

<sup>いとうおさむ</sup> **伊藤修** (安政2年(1855)～大正9年(1920))

東京法学社(現法政大学)の創設者の2人である。

金丸は杵築弓町出身で、杵築の藩校である学習館でフランス語を学び、日本初の法律専門誌『法律雑誌』を発刊した人物でもある。

伊藤は杵築煙硝倉出身で、杵築初の弁護士となり、豊後高田市や日田市で判事も務めた。



金丸鐵(左)と伊藤修(右)  
(出典:きつき偉人伝)

6) <sup>ほりていきち</sup> **堀悌吉** (明治16年(1883)～昭和34年(1959))

<sup>いくわ</sup> 杵築生桑出身の海軍軍人である。

明治38年(1905)に日本海海戦に参加し、やがて、「戦争は悪、凶、醜、災である。」との考え方をもち、海軍軍縮、国際協調を基に戦争回避に尽力した。

海軍として一線を退いた後も、日本飛行機や浦賀ドックの社長として活躍した。



堀悌吉(出典:きつき偉人伝)

7) <sup>しげみつまもる</sup> **重光葵** (明治20年(1887)～昭和32年(1957))

<sup>ぶんごおの</sup> 豊後大野に生まれ、中学までを杵築八坂で過ごし、大学を出て外交官となった。

イギリス、中国、ソ連などに赴任し、戦争回避に努めたが、やむなく第2次世界大戦となった。戦時中も外務大臣として終戦に力を注ぎ、終戦時には国の全権代表として降伏文書に調印した。戦後も政党の総裁や副総理兼外務大臣となり国際的にも活躍した。国連加盟時には初の政府代表として、総会で「日本はある意味において東西のかけ橋となり得る」という有名な演説を行った。



重光葵(出典:きつき偉人伝)

8) <sup>ふじわらよしえ</sup> **藤原義江** (明治31年(1898)～昭和51年(1976))

山口県に生まれ、まもなく母と共に杵築へ来て、藤原家に入籍した。イタリアで学び、テノール歌手として世界に知られるようになった。帰国後は歌手として活躍すると同時に、「藤原歌劇団」を設立し、日本のオペラ界の重鎮となった。日本の歌を海外に広めることにも貢献した。



藤原義江(出典:きつき偉人伝)

## 4. 文化財等の分布状況

### (1) 指定等文化財の分布状況

指定等文化財の件数を下表にまとめる。

国指定・選定文化財が9件（杵築地域4件、山香地域2件、大田地域3件）、国登録文化財が1件（杵築地域）、県指定文化財が44件（杵築地域21件、山香地域9件、大田地域14件）、市指定文化財が129件（杵築地域50件、山香地域47件、大田地域32件）あり、計183件の指定等文化財が存在する。

有形文化財（建造物）が最も多く57件が指定等を受けているが、このほか、彫刻や工芸品、古文書、遺跡、無形の民俗文化財をはじめとし、多種多様な指定等文化財が分布している。

表 杵築市内の指定等文化財件数※3※4 （令和2年（2020）11月時点）

種類		国		県	市	合計
		指定・選定	登録	指定	指定	
有形文化財	建造物	3	1	16	37	57
	絵画				4	4
	彫刻	2		9	32	43
	工芸品			4	7	11
	書籍・典籍				2	2
	古文書			5	8	13
民俗文化財	有形の民俗文化財	1				1
	無形の民俗文化財			4	7	11
記念物	遺跡	2		4	21	27
	名勝地			1	6	7
	動物、植物、 地質鉱物			1	5	6
伝統的建造物群		1				1
合計		9	1	44	129	183

※3 このほか「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財（いわゆる、記録選択）」として、国の記録選択が1件、県の記録選択が4件ある。

※4 指定等文化財の一覧は巻末の資料編に記載。

種類	国		県	市
	指定・選定	登録	指定	指定
有形文化財	建造物	🏠	🏠	🏠
	絵画	—	—	🖼️
	彫刻	🗿	—	🗿
	工芸品	—	—	🍵
	書籍・典籍	—	—	📖
	古文書	—	—	📜
民俗文化財	有形の民俗文化財	🏠	—	—
	無形の民俗文化財 (記録選択を含む)	🔴	—	🟢
記念物	遺跡	🏹	🏹	🏹
	名勝地	—	📍	📍
	植物、動物、地質鉱物	—	🌿	🌿
伝統的建造物群	🏠	—	—	—

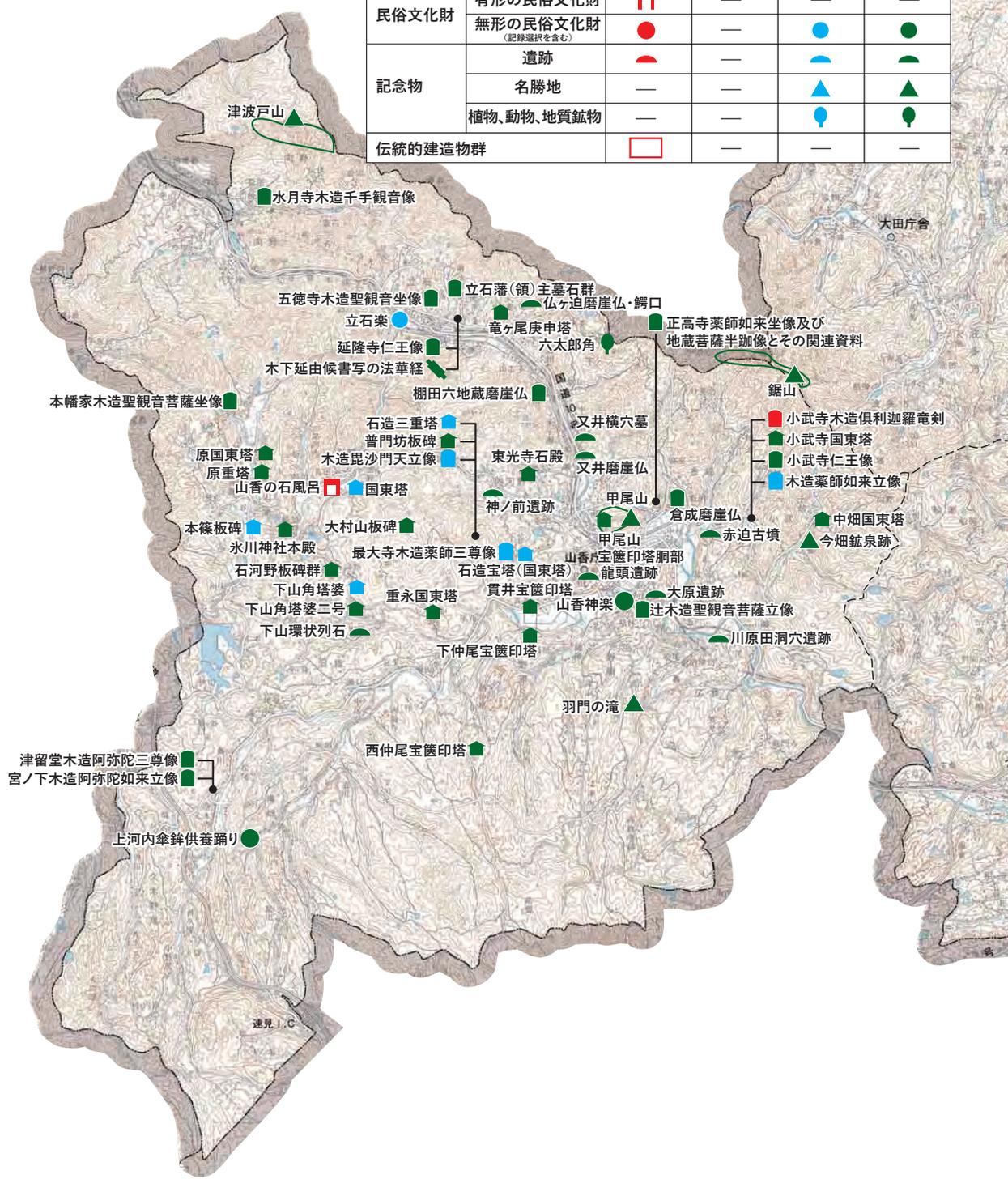


図 指定等文化財の分布 (山香地域)

杵築地域・山香地域

種類	国		県	市
	指定・選定	登録	指定	指定
有形文化財	建造物	■	■	■
	絵画	—	■	■
	彫刻	■	■	■
	工芸品	—	■	■
	書籍・典籍	—	—	■
	古文書	—	—	■
民俗文化財	有形の民俗文化財	■	—	—
	無形の民俗文化財 (記録選択を含む)	●	●	●
記念物	遺跡	■	■	■
	名勝地	—	■	■
	植物、動物、地質鉱物	—	●	●
伝統的建造物群	□	—	—	—

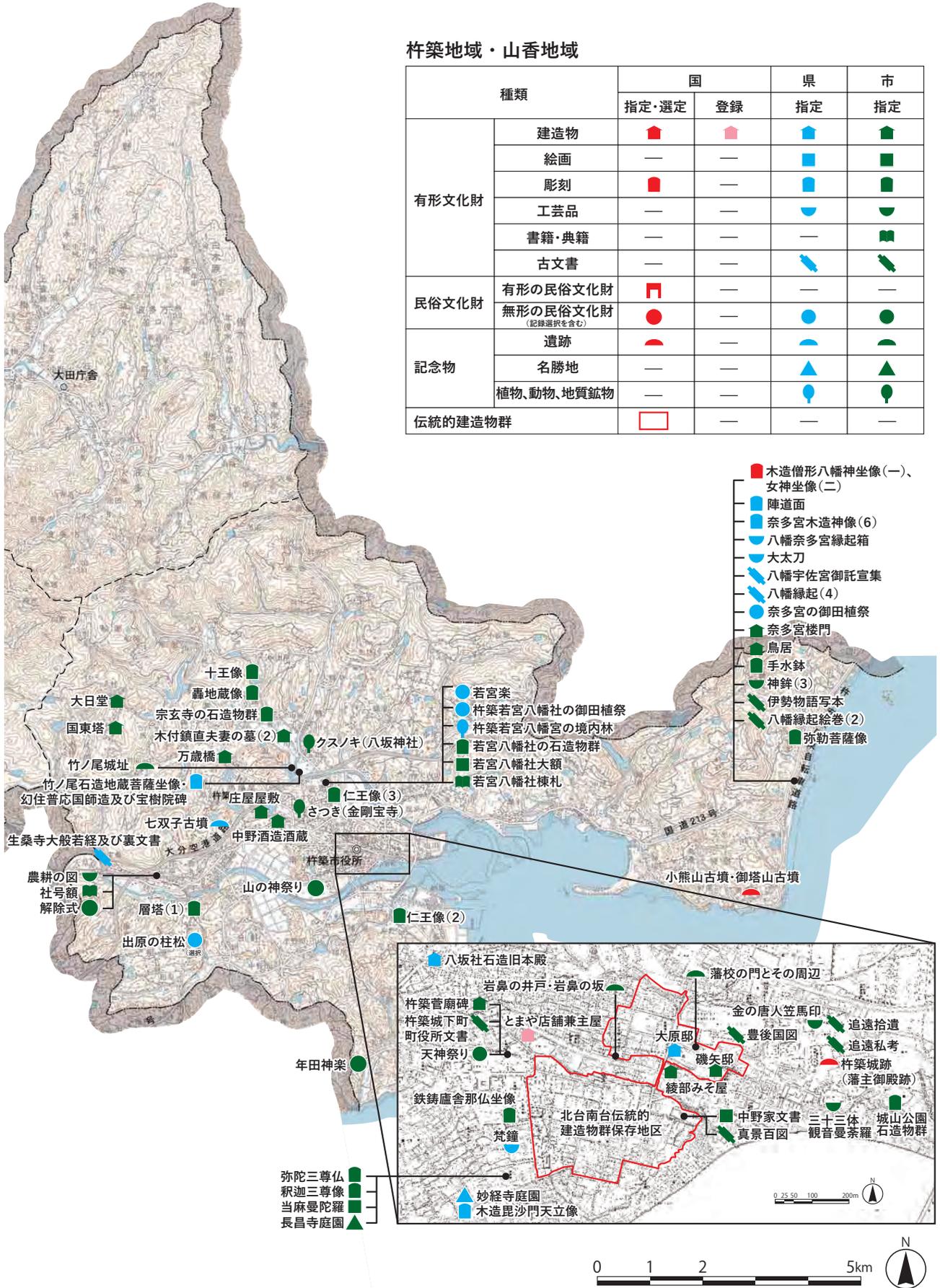


図 指定等文化財の分布(杵築地域)(※個人所有の有形文化財については、一部記載を省略している)

# 大田地域

種類	国		県	市
	指定・選定	登録	指定	指定
有形文化財	建造物	🏠	🏠	🏠
	絵画	—	—	🖼️
	彫刻	🗿	—	🗿
	工芸品	—	—	🏺
	書籍・典籍	—	—	📖
	古文書	—	—	📜
民俗文化財	有形の民俗文化財	🏠	—	—
	無形の民俗文化財 (記録選択を含む)	●	—	●
記念物	遺跡	🏠	🏠	🏠
	名勝他	—	📍	📍
	植物、動物、地質鉱物	—	🌿	🌿
伝統的建造物群	🏠	—	—	—

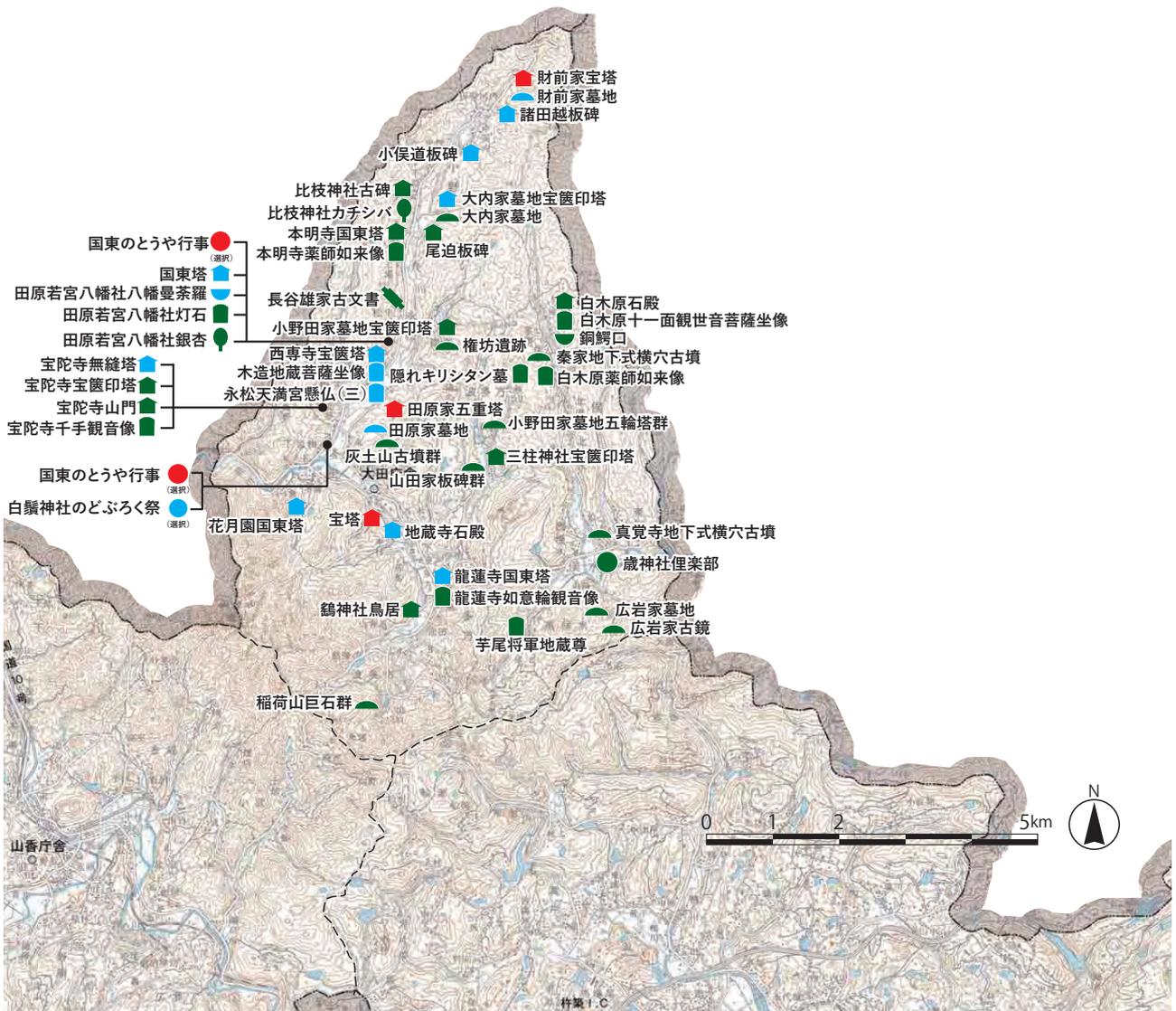


図 指定等文化財の分布 (大田地域)

## (2) 国指定等文化財

### 1) 重要文化財（建造物）

#### ① 財前家宝塔

大田地域にあり、財前家墓地の中央にある基壇上の3基の国東塔のうちの最大のものである。

元応3年(1321)鎌倉時代造立で、財前家の祖先ざいぜんみののかみ財前美濃守が死後の冥福を祈るために生前に造立した供養塔である。総高3.01m、石材は角閃安山岩かくせんである。



財前家墓地宝塔

#### ② 田原家五重塔

大田地域の長福寺境内の崖下に、竹林ともみじの巨木で囲まれて建っている。延元4年(1339)南北朝時代くつかけ建立である。当初、沓掛城主田原直平たわらなおひらの墓と伝えられたが、昭和44年(1969)解体修理をした結果、地中からの出土品がなく、供養塔であることが分かった。総高4.11m、石材は角閃安山岩である。



田原家五重塔

#### ③ 宝塔

大田地域にあり、元徳2年(1330)鎌倉時代造立で、塔身に「奉納妙法華經三部元徳二年庚午十月二十八日大願主沙弥ママ□□」の銘が刻まれている。この銘より、鎌倉末期から南北朝期成熟期に移行する過渡期の塔と考えられている。総高2.08m、石材は角閃安山岩である。



石丸宝塔

### 2) 重要文化財（彫刻）

#### ① 木造僧形八幡神坐像（1）・女神坐像（2）

いずれもかやざい榿材を用いた一木造で、木心を含み、うち内削りを施さない。髪・眉に墨、肉身に白土、衣に朱を彩色する。僧形の男神像でんおうじんてんのう(伝応神天皇)は、元々、宇佐神宮のご神像であり、宇佐神宮の行幸会の際に奈多宮にうつされたと伝えられる。伏し目がちで切れ長の目に長い耳たぶ、豊かな頬や顎の下の三道などの表現は、神像というよりも仏像の表現に近い。



左：木造僧形八幡神坐像（伝応神天皇）  
右：女神坐像（伝神功皇后）

男神像と宝冠の女神像(伝神功皇后)<sup>でんじんこうこうごう</sup>は、11世紀から12世紀の造立とされ、面立ちに同種の趣があり、同時の製作とみられる。比売大神<sup>ひめのおおかみ</sup>と伝えられるもう1躯の女神像は、全体的にほかの2像と比べて、一まわり小さく、やや遅れての造立と考えられる。像高は、男神像53.5cm、女神像55.2cm、49.0cm。



女神坐像(比売大神)

<sup>おだけじもくぞうくりからりゅうけん</sup>  
②小武寺木造俱利迦羅竜剣

山香地域の小武寺にある。榧<sup>かや</sup>を用いて、平安時代後期に制作されたもので、俱利迦羅竜が立上がり剣を呑もうとする姿を表している。俱利迦羅は不動明王の化身とされ、国や人を守り、病を取り除く力があるとされた。また、竜は雲や雨を支配する力があるとされていたことから、この像は、雨を降らせて、五穀豊穰を願う信仰に用いられていたと考えられている。像高178cm、台座6.7cmである。



小武寺木造俱利迦羅竜剣

### 3) 重要有形民俗文化財

①山香の石風呂

山香地域の泉福寺境内の西側崖面に築造されたものである。上下2階式で、下部で火を焚き、上部が浴室となり、サウナのように使われていた。築造年代は不明であるが、安永8年(1779)の『山香郷図跡考』に記載があり、江戸時代中期には存在したことになる。



石風呂

### 4) 記念物(史跡)

①小熊山古墳・御塔山古墳

小熊山古墳は、<sup>ぜんぼうこうえんふん</sup>前方後円墳で、長さ約115mである。築造は3世紀後半から4世紀初めとされている。御塔山古墳は、円墳に、造り出しの付いたホタテ貝式古墳で、最大径約80mの九州最大級の規模である。築造は5世紀なかころである。



小熊山古墳と御塔山古墳

## ② 杵築城跡

杵築城跡は、豊臣政権から江戸幕府の成立、安定へと向かう社会・政治情勢の変化に応じて、その構造を大きく変えることが確認された城跡で、「一国一城令」による破却以前の建物構成や構造が分かるなど、江戸時代初期の城郭の実態を知ることができる。指定範囲は現在模擬天守がある台山及び北麓の藩主御殿跡の公有地を中心とした50,714.99㎡。



杵築城跡全景

## 5) 重要伝統的建造物群保存地区

### ① 杵築市北台南台伝統的建造物群保存地区

北と南の台地上に区画された杵築城下町の武家地であり、藩政期（延宝（1673）から元禄（1704）ころ）の地割を踏襲し、近世武家住宅の主屋や門、石垣、石段、土塀などが良好に残っている。北台と南台は酢屋の坂、塩屋の坂を介して結ばれている。



北台南台伝統的建造物群保存地区

## 6) 記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財

### ① 国東のとうや行事

大田地域では、とうや行事が受け継がれている。なかでも、永松の田原若宮八幡神社と杵掛の白鬚田原神社は地域の人が属する「神元座」によって行事が行われ、古式を継承している。神元のなかから毎年順番に「祝元」が決められ、当番になった家の人が祭りを取り仕切る風習が続いている。



とうや行事

## (3) 県指定文化財

### 1) 有形文化財（建造物）

#### ① 旧大原家住宅

杵築地域の城下町にある。家老を務めた大原氏の邸宅で、長屋門、主屋、庭園など、当時の上級武士の代表的な邸宅である。建築年代は19世紀なかごろ以前と推定されている。現在は公開施設となっている。



旧大原家住宅

## 2) 無形民俗文化財

### ① 奈多宮の御田植祭

八幡奈多宮は杵築地域の伊予灘に面して位置する。御田植祭は、毎年4月5日に行う稲作の予祝儀礼（神前で米ができるまでの作業を真似た演技を行い、豊作を願う儀式）である。牛や馬に扮して行う代掻き、早乙女役の子供たちが田植え唄に合わせて行う田植えなどがある。田植えが終わったところに、妊婦役が弁当を届けに登場し、産気づいてその場で出産する場面もある。狂言の影響を最も強く受けている御田植祭である。



奈多宮の御田植祭

## (4) 市指定文化財

### ① 杵城菅廟碑

飛松天満社拝殿横にある総高2.92mの石碑で、碑面に銅板をはめこみ、板面には三浦梅園の原文による碑文を陰刻している。これは飛松天満社創始百年の記念に記されたもので、天満社の縁起と祭神の精神をといた780字の漢文である。

安永8年(1779)から天明3年(1783)にかけて建立され、御影石造りの碑石と三重の台石(三重目は亀形)からなる。



杵城菅廟碑

## (5) 登録有形文化財

### ① とまや店舗兼主屋

杵築地域の城下町にあり、江戸時代中期ころから続く商家で、江戸後期ころから茶業(製茶・販売)を始め、現在まで続いている。

明治8年(1875)に建築された白漆喰仕上の町家である。昭和62年(1987)に前面道路が拡幅した際には、3m以上曳家したが、形状を変えず、元の姿が保たれた。



とまや店舗兼主屋

## (6) 主な未指定の文化財

### ① 重光家

重光家は大字本庄に位置する。第2次世界大戦期の日本の外交官である重光葵が幼少期に過ごした家である。

敷地内には、主屋と蔵が残っている。主屋は漢学者であった重光葵の父直愿なおまさによって「無迹庵」と名付けられた。蔵の2階は葵が勉強に励んだ場所と伝わる。現在は遺品や写真の数々が展示されている。また、屋敷神を祀る祠も残っている。



重光家蔵（無迹庵）

### ② 亥の子行事

旧杵築市内では、農村、漁村、町部に関わらず継承されている行事。10月の亥の日に行われるのが慣習であったが、近年は、10、11月のなかで子供が集まることのできる日を選んで行われる。

作法は、「亥の子石」と呼ばれる柿形の石に10本ほど放射状に縄を結び付けたものを唄に合わせて、家々の庭先を搗ついて回る。搗いた家には御幣ごへいを配り、お返しにお金をもらう。御幣は虫除けの効果があると信じられ、先を割った竹に挟んで畑に供える地域が多い。また搗き終わったあとの石に結んでいた縄は、輪にして屋根に上げると蛇除けになるとされている。そのため行事が終わった地区内では庭先の搗いた穴跡や畑の新しい御幣を見ることができる。この行事は、農耕に関わる年中行事であると同時に、村社会における子供の成長を促す行事としての役割をもつ。近年は大人が行事の進行自体を補助する地域も出てきたが、本来は、準備から当日のルートや段取り、お金の分配方法などは子供のなかの年長者の差配で決めるもので、長となった子供の技量が試されるときでもある。

少子化や道路のコンクリート舗装が進むにつれて休止を余儀なくされた地域が多いが、今でも亥の子石は各地区のお宮や公民館で大切に保管されており、近年新興住宅化した地域では、再開を望む声がかかる。

亥の子行事の古い記述は、享保14年（1729）10月8日や元文5年（1740）10月2日の『町役所日記』に見ることができ、内容は、搗く場所は自分の町の範囲内のみで他組には回らないようにというお触れである。これは祭日が亥の月の亥の日に各町が一斉にしていたこと、子供が多く現在の行政区内に数組の亥の子組があったことにより、まわっているときに鉢合わせになり、喧嘩がはじまったためである。喧嘩に負けた亥の子組は石を取られるか破壊された。これは江戸期に限らず、市内各地のほとんどの地域が亥の子をしていた30年前には当たり前であった。現在は、納屋なや、灘手なだて、守江みやじ、八坂やさか（中）なか、上本庄かみほんじょうなどの地域で継承されている。



中地区の亥の子行事

## (7) 主な特産品(農産物・醸造品・菓子・郷土料理)

### 1) きつき茶・きつき紅茶

温暖な気候と山間部の高低差を活かして茶の栽培が盛んである。茶は、寛文年間(1661~1672)ごろに松平英親が茶園を開かせたのが始まりとされ、独特の甘みとコク、豊かな香りが特徴である。昭和32年(1957)には紅茶の栽培も始め、親しまれている。



きつき茶

### 2) 杵築みかん

戦後、本格的にみかん栽培が広がり、昭和40年(1965)度には県下最大の産地となった。栽培の難しい品種である「天草」のなかから、味や外観の基準を満たしたものは「美娘」と名付けられ、糖度と酸味のバランスの良い味わいとして人気を集めている。



美娘

### 3) 山香米

山香地域は粘土質の赤土、清らかな水に恵まれた環境であり、米どころとなっている。明治初期には別府まで売りに行き、評判を得ていたことが『山香町誌』(1982)に記されている。特に、すし米として評判がよく、現在では「山香米」ブランドとして定着している。



山香米

### 4) 牡蠣

守江湾は大小9つの河川が流入し、海中栄養分が豊富なため、牡蠣の産地となっている。明治33年(1900)から養殖が試みられ、戦後本格化した。11月から2月のシーズンは海沿いに牡蠣焼きの店が並び、新鮮な牡蠣が味わえる。いらなくなった牡蠣殻は漁礁として再利用している。



牡蠣

### 5) 七島藪

畳表や草履、七島縄等に用いられた植物である。杵築藩主松平英親により栽培が奨励され、財政を支える特産品であったが、その後衰退し、一時は栽培が休止した。平成26年(2014)に「七島い栽培復活継承協議会」を設立し、平成27年(2015)度に2カ所に植え付けを行い、再出産を図ったことで、工芸士が増えている。



七島藪を使った畳表(出典:杵築七島いの歴史)

## 6) 豊後梅

杵築藩主が砂糖漬けにした梅の実を将軍に献上したと伝わる。早春に咲く淡紅色の美しい花と、立派な実をつける豊後梅は、現在も観賞用、採取用としてあちらこちらに植えられ、長い間、市民に親しまれている。市木でもある。



豊後梅

## 7) うれしの

江戸時代、大谷屋（現在の若栄屋<sup>わかえや</sup>）の鯛茶漬けを気に入った殿様が言った「うれしいのお」という言葉から名付けられた。シンプルながら、秘伝の胡麻だれが豊かな風味を与えている。出汁ではなく、茶をかけて味わうのが特徴。



うれしの

## 8) 豊後牛

昭和30年（1955）、市の施策として畜産の振興を図り、生産が拡大した。霜降りの細やかさ、脂の上品な甘さ、肉質の柔らかさ、まろやかでとろけるような味わいが人気で、市内各地の食事処で豊後牛を使ったメニューが提供されている。



豊後牛

## 9) 日本酒

元禄7年（1694）、貝原益軒<sup>かいばらえきけん</sup>が紀行文に「木付ハ東北ニ海在。近シ。入海有。城跡有。此地海魚甚多。美酒有。」と記している。水、米、風土に恵まれ造られる銘酒は、伝統的な技法を織り交ぜ、深い味わいを受け継いでいる。



日本酒

## 10) 味噌

城下にある酢屋<sup>すや</sup>の坂の入口に、創業明治33年（1900）の綾部味噌がある。創業以来、手作業で作られる天然醸造の味噌は、県内産大豆、国産米、九州産大麦を使用し、地下の天然水で仕込んで、昔ながらの味を伝え続けている。



味噌

## 11) ちりめん

別府湾で水揚げされたカタクチイワシの稚魚であるシラスだけを使用し生産されるちりめんは「豊後別府湾ちりめん」と呼ばれ添加物を一切使用せず活きたおいしさをそのまま味わうことができ人気が高い。本市は県内随一のシラスの漁獲量を誇っている。



ちりめん